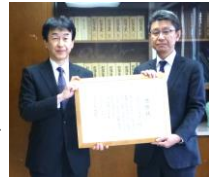


北海道に貢献する意欲のある若者の海外挑戦を、官民一体で応援する「ほっかいどう未来チャレンジ基金」の旬な情報をお届けします！1月末時点で、第2期生8名が海外留学中です！

知事感謝状を贈呈しました（株式会社北洋銀行様）

基金設置当初から毎年度ご寄付をいただいていた(株)北洋銀行様に対し、知事感謝状を贈呈いたしました。

(株)北洋銀行様では、平成29年2月から取り扱いをはじめた「パラスポーツ応援債」発行金額の0.2%相当額を、道内の障がい者スポーツ活動に取り組む選手・団体等に寄附を行っており、平成29年と30年には、みらチャレ基金のスポーツコースにご寄附をいただいております。



三岸好太郎美術館で留学成果を発表しました！（西野留以さん）

北海道を代表するダンサーを目指して、平成30年1月から3か月間アメリカに留学した第1期生の西野留以さん（文化芸術コース）が、1月12日に道立三岸好太郎美術館で留学成果を発表するダンス公演を行い、約200名の見学者が来場しました。

公演は、第一部として「少女の歩みー絵画をめぐって」とのタイトルで、展示作品にまつわり、揺れ動く少女の内面、心の世界をダンスと音楽で表現しました。ダンスには、少女の子ども時代を投影した二人の小学生ダンサーも登場し、バイオリン奏者の林ひかるさんの生演奏のもと、三岸好太郎が約100年前に制作した絵画が囲む中、美術館という限られた空間を幻想的に舞いました。



事前相談を受け付けています

平成31年4月1日から募集開始予定の第3期生への応募を検討している方や関係者等を対象に、みらチャレの応募資格や支援内容などについてのご相談を随時受け付けています。留学計画の検討にあたり制度を詳しく知りたい方や、応募後の選考プロセスなどについてご不明な点がある方は、是非ご相談ください。※お問合わせ先は裏面下の連絡先です。

学生留学コース

第2期生 伊藤 昂 さん アメリカ、オランダ、オーストラリア ～スポーツビジネスを学び、北海道のテニス界の国際化に貢献～

テニスの国際大会が開催されるアメリカ、オーストラリア、オランダの3か国に、10月から10か月間留学中。

オーストラリアではテニスを趣味にしている人が多いですが、その理由として、FIX（フィクスチャーシステム）により、気軽にテニスができる環境があることが一因だと考えています。システムの特徴として、団体戦にすることで一人にかかる体力的・精神的負担を少なくしていること、大人の部の試合は仕事終わりの夜に実施するといった、時間帯が配慮されていること、ジュニアの試合では、日本と異なり親も同じコートに入って球拾いやアドバイス等ができ、子供のうちは皆で楽しくテニスをできる仕組みがあること、の3点が挙げられます。



第2期生 立岩 文武 さん オーストラリア（タスマニア） ～大規模農業の手法を学び、北海道農業の持続を目指す～

大規模農業が進んだオーストラリアタスマニア州に、9月から10か月間留学中。

美瑛町の農家さんが、11月下旬からタスマニアのTAFEという農業の専門学校に勉強に来ており、北海道農業との違いについて意見交換をしました。また、日本からかぼちゃの種を送りタスマニアで育てる試みも行い、彼らがタスマニアを去った後は、TAFEスタッフと一緒に育成に携わっています。かぼちゃの栽培には面積が必要で、作物ごとの間隔を大きくすると、条間（一株ごとの間隔）を大きくとるので、どちらが良く育つのか実験をしています。1月中旬頃には葉や茎が大きくなり徐々に違いが明らかになってくると思います。



第2期生 林 泰佑 さん フィンランド（エスポー） ～木造建築技術を学び、海外との架け橋となる建築家を目指す～

森林環境が北海道と似たフィンランドで、9月から1年間、アアルト大学のウッドプログラムを受講。

最終課題である駅待合室の建築プロジェクトでは、駅のあるKoriaという町のランドマークとなっている、橋や軍隊が使っていた建物を元にコンセプトを考えデザインして、案をプレゼンしました。日本で受けた建築教育では、設計の根拠となる要素や文脈を先に分析して設計していましたが、ウッドプログラムの他の学生は、とりあえず形を作り出し、その形の意味を後から考えながら発展させていく方法で設計しており、何にも縛られない自由で伸び伸びとしたデザインが生まれていました。考え方に正解は無いので、設計条件などによって上手く使い分けたり組み合わせたりすることが大事であることを、今回の最終課題を通して学びました。



スポーツコース

第2期生 梅村 拓未さん ドイツ (ハイデルベルク) ～バルシューレを学び、子どもの運動課題を解決～

バルシューレの創設元ハイデルベルク大学で、7月から11か月間研修中。

今月は、ベビーバルシューレ、ミニバルシューレの研修に参加し、遊び場の設置方法やメニューの組み方等について学びました。1歳～3歳半までのベビーバルシューレでは親が子どもに付き添いますが、4歳～6歳までのミニバルシューレでは親は離れて見守っています。指導者の指示の出し方は、ドイツも日本も個人で異なるため、明確な違いは見られませんが、指導者と子どもの距離感に関しては、子どもが指導者に質問しやすい環境づくりに努めるなど、どの指導者も同様に徹底していると感じています。



文化芸術コース

第2期生 鴻野 祐さん フィンランド (エスポーほか) ～「木」を深く学び、デザイナーとしてまちづくりに貢献～

森林環境が北海道と似たフィンランドで、7月から1年間、現地リサーチとアアルト大学のウッドプログラムを受講。

駅待合室の建築プロジェクトは、最終講評に向けて様々なディテールを詰めていきました。私のデザインコンセプトは「駅と町を結ぶ」で、日本の縁側を参考に設計しました。縁側は内側でも外側でもない曖昧な空間で、普段は廊下として使用されることが多いですが、外向きに座ることができるとして使用されることが多いですが、外向きに座ることができる日本独自の建築様式が、町と駅を結ぶのには適していると考えたからです。私はこの建物を「EL ÄMÄ」と名付けました。フィンランド語で人生や生活を意味しています。



未来の匠コース

第2期生 今村 直史さん ニューージーランド (マルボロ) ～ブドウの栽培技術を磨き、北海道を一大ワイン産地に～

ワイン用ブドウを栽培する現地ワイナリーで、11月から5か月間、北海道で未確立の栽培技術を修得中。

12月は、マルボロのワイナリーで働く同年代の日本人の方たちと多数知り合う機会があり、彼らが働く醸造所やブドウ畑について、情報交換をしながら見学させていただいたり、連絡を取り合ったりするようになりました。皆、現地で10年以上の経験を持ち、普段の作業で私が疑問に思っていた事を、自分のワイナリーではこうしています、と教えていただけるようになりました。彼らのおかげで、マルボロでのブドウ栽培・ワイン造りへの理解の幅を以前よりぐっと大きく広げることができたと感じています。



第2期生 服部 大地さん イタリア (フィレンツェ) ～地産地消の調理法を学び、北海道の食の魅力を深化～

スローフード発祥の地イタリアの料理学校やレストランで、9月から6か月間、地域資源を活かした調理法を修得中。

現在は、トスカナ州のLuccaという都市にあるレストラン「Punto officina del gusto」で、Dolce (デザート) を担当しています。Dolceで一番興味を持ったのは、ビーツを使った「TORTA DI BARBAROSSA」です。赤いパウンドケーキにアイスクリーム、チョコレートクリームが塗られたデザートで、色使いが非常に鮮やかです。北海道に帰ったら、是非試してみたいと思います。徐々に仕込みの手伝いもするようになりましたが、お店での研修期間も3月までなので、気を引き締めて勉強したいと思います。



応援パートナーの皆様

(平成31年1月現在・敬称略)

有末 真哉 石川 諭史 遠藤 光二 小黒 敬三 佐藤 友昭 (税理士法人FULL SUPPORT 代表社員税理士) 武田 孝 (拓殖工業(株)代表取締役会長) 船津 秀樹 その他匿名希望の個人・企業4者

古本募金による寄附を受け付けています。



応援パートナー「NORTH CREATE」様のご協力により、ご家庭や会社で不要になった本等を寄附することで、その査定額全額が基金に寄附され、若者の支援に繋がる「古本募金ハピぼん」の取組を行っています。

個人での参加はもちろん、企業単位での参加も可能ですので、ハピぼんホームページをご覧ください。基金事務局までご一報ください。(これまでの寄附 500人の方から4,057冊)

北海道総合政策部政策局総合教育推進室

TEL : 011-206-7380 (直通) FAX : 011-232-6313

E-mail : mirai.jinzai@pref.hokkaido.lg.jp

ホームページ : <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/sky/mirai-jinzai.htm>



助成対象者のチャレンジ風景をお届けします。

